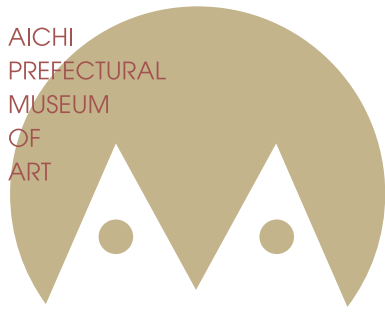


AICHI
PREFECTURAL
MUSEUM
OF
ART



MEMBERSHIP

愛知県美術館友の会・会報 第24号

空中回廊

この企画展はPowerful&Peaceful [若冲と江戸絵画展] / 会員のひろば / 愛知県美術館コレクションから一深く知ると、もっとみえてくる [夢を追って] / 講座ダイジェスト / 美術館から / 友の会活動紹介



○この企画展はPowerful & Peaceful○

プライスコレクション 若冲と江戸絵画展

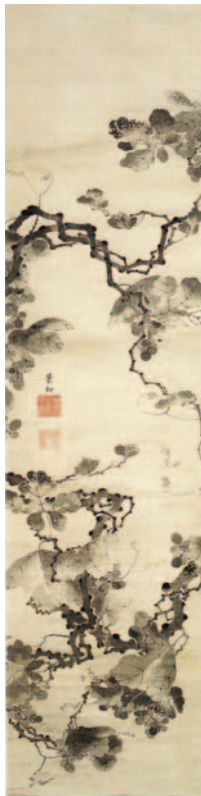
2007年4月13日(金) から 6月10日(日) まで開催

アメリカ人ジョー・プライスとエツコ夫妻によって集められた江戸時代を中心とした日本絵画のコレクションの全貌を目にすることができる最後のチャンスがやってきた。 *Let's enjoy!*

PLEASURE 喜悅

オクラホマのアップタウンボーイだったジョー・プライス氏が伊藤若冲の絵に出会ったのは1953年、24歳のとき。父の会社のオフィスビルの建設に携わっていた著名な建築家フランク・ロイド・ライトのお供でニューヨークの東洋古美術店を訪れた。ふと目に留まった掛け軸を眺めているうちに魅了され、大学卒業祝いのスポーツカーを買うつもりで父からもらったお金をその掛け軸に使ってしまった。その掛け軸が若冲の《葡萄図》だった。

ライトは折に触れてプライス氏を野原に連れ出し、草花を摘んでは、その茎や葉がいかにかに理に適った構造になっているかという「Nature」の理念を教えたという。その影響で絵の中に「Nature」を見出した《葡萄図》を求



伊藤若冲《葡萄図》
江戸時代18世紀

めたのである。どっしりと地面を踏みしめた虎の足や、ふんわりと体を包み込むような鶴の羽など、コレクションの作品の中に「Nature」を感じる作品は実に多い。

彼の絵画収集の方針はシンプルだ。心惹かれるか、目が喜びを感じるかということに基づいている。絵画に対して文学性や精神性を求めることも、作者の名前を気にすることもなかった。そんなふう集められたコレクションには、偶然にも若冲が多く含まれていった。

PURE 純粋

若冲は正徳六年(1716年)京都・高倉錦小路の裕福な青物問屋の総領息子に生まれた。学問嫌いで、芸事全般ことごとく才能無し。しかも商売の才覚も意欲も持てず、ただ絵を描くことだけを楽しみとしていた。23歳で家督を継ぐも、絵を描き続け、40歳で隠居してから87歳で没するまで絵を描くことに没頭した。

絵の基本を、当時隆盛を極めていた狩野派の絵師の下で学び、模写をすることから始めた。しかし、狩野派の絵を写すことに飽き足らず、古い中国絵画を模写することに移行した。千点を超える模写をした後、その筆先は写生へと移っていった。鶏を描くために、まずは自宅の庭に十数羽の鶏を飼い、一年間ただひたすらに観察に明け暮れた後、ようやく写生へと取り掛かった。



こうして描かれたのが《旭日雄鶏図》や《紫陽花双鶏図》である。

若沖の絵画には、若沖の目を通して徹底的に観察され、若沖の感覚で掴み取られた色と形がある。写生の中に想像力が入り込んだ若沖独自の絵画世界が完成していった。

若沖は酒を嗜まず、肉食を避け、妻も娶らず、絵一筋の純粹無垢な精神に貫かれた人生を送った画家であった。

PARADISE 楽園

プライスコレクションには、いくつかの特徴がある。1つには動物画の多いことである。しかも1つの画面の中に複数の動物がいる。大きな白象と鳥、黒い牛に包まれた子犬、鮎と蟹、猿と蜂など。その典型ともいえる絵が若沖の《鳥獣花木図屏風》であろう。左隻には鳳凰を中心とした鳥の群れが、右隻には白象を中心とした動物の群れが描かれている。花が咲き乱れ、果実がたわわに実り、紺碧の海原には白い波が立ち、現実の生き物と空想の生き物が何十種類と仲良くひしめきあっている様は楽園そのものである。プライス氏は「友だちは良いものだ」という考えの下にこれらの作品を集めたのであろう。平和な楽園に集うのは動物だけではない。三十六歌仙も、吉原の美人も、祭礼に連なる武士や町人も、百人のお多福も、果ては、観音様や幽霊までも。

他の特徴としては、画面の美しさが際立っていることである。プライス氏が今展覧会に寄せて書いたブログには作品ごとの解説があるが、「美しい」という言葉が多用されている。筆で描かれた優美な線、絵の具の鮮やかな色彩、と同時に

何も塗られていない絹地の白、ひらめきと熟考のせめぎ合う大胆な構図、豊かな表現を可能にした高い技術に対する賞賛が惜しみなく注がれた言葉である。目を凝らし、心を研ぎ澄ませて絵と対峙しているプライス氏の真摯な姿が見えてくるようである。彼もまた楽園の住人なのだろう。

これらの作品の前に立った時、鑑賞する私たちも楽園の住人となれるだろうか。

PRINCIPLE 信念

「日本美術を鑑賞する際、光の果たす役割は非常に重要である。」というのがプライス氏の持論である。より明るい光の中ですべてが見えるよりも、暗がりの中で想像力を借りて見る方が多くのが見えてくる。人間の想像力のすばらしさを実感できるのだ。金銀箔や胡粉、雲母、顔料は電灯の光の下では単調な色合いに見えてしまうが、自然光の下では陰影をはっきり見せ、微妙なニュアンスを醸し出す。一日の中で移ろい行く自然光で様々な絵画の表情を楽しむのがプライス流鑑賞法なのである。

愛知県美術館の展示では自然光を使うことが叶わなかった代わりに、1作品だけではあるが、照明に工夫を凝らして鑑賞者を楽しませる趣向が調えられている。また、プライス氏のたつての希望で、ガラス越しではなく、露出展示されている作品が数多い。その数は今展覧会が巡回した4会場中、最多である。

心行くまで、何度でも楽しみたい展覧会である。

※記事は本展覧会を担当された深山主任学芸員へのインタビューをもとに構成しました。(文責：折戸)



伊藤若沖《鳥獣花木図屏風》江戸時代18世紀

○会員のひろば○

伝統楽器サントウールの響き 友の会事業活動紹介

◎「ペルシャ文明展」関連イベント『伝統楽器サントウールの響き』

昨年11月、愛知県美術館で開催されていた「ペルシャ文明展」にちなんで、「伝統楽器サントウールの響き」と称して演奏会が開催されました。サントウールとはペルシャの古楽器で、台形の箱に金属製の弦を張り、これを撥で叩いて演奏するものです。私を含め、会場に来たほとんどの人にとって、見るのも、聴くのも初めてだったことでしょう。

演奏されたのはイラン出身のプーリー・アナビ



アンさんと、その門下の河村真衣さんのお二人です。初めて聴いたサントウールの音色は、澄んだ金属音で



ありながら有機的な温かみもある、とても神秘的なものでした。終演後には、初めて目にする楽器に興味津々といった様子でお2人の周りに聴衆が集まってきたので、撥を持たせて叩かせていただきました。一般の演奏会ではありえない「大サービス」です。

また、演奏をはさんでプーリーさんの娘のダリア・アナビアンさんによるペルシャ文化の紹介もあり、全体で2時間ほどのプログラムにペルシャの真髄を凝縮したような、とても充実したひとときでした。(イベント担当理事 森)

◎友の会事業活動紹介（講座・講演会担当）

友の会では、会員の皆さんがより多くの関心ある分野をお楽しみ頂けるよう、友の会主催の講座・講演会を運営しています。

これらは、友の会が様々な方の協力を得て企画・交渉・準備・進行を行います。平成18年度は、会員限定の連続講座として「イタリアルネッサンス美術を読む」と「浮世絵の精華」を、講演会として現代美術「彫刻家若林奮を巡って」と市川館長退官記念「美術の森」を開催いたしました。

講座・講演会開催に当たっては、友の会会員サポーターの方々が受付や準備などのお手伝いをして下さり、不可欠の戦力としていつも感謝しております。

昨年11月に美術館が開催した公開シンポジウ

ム(仏画の修復)は、これまでにない展開やその企画力と進行の鮮やかさで高く評価されましたが、



ここでもサポーターの皆さんが裏方として受付・来客対応などに大活躍されました。

次年度以降も、美術館主催分との調整を図りながら、会員の皆さんのご期待に応えられる質の高い講座・講演会を提供できるよう取り組んでいきますので、ご協力をお願いいたします。

(講座・講演会担当理事 平野)

○愛知県美術館コレクションから一深く知ると、もっとみえてくる○

夢を追って

収蔵庫にあるとき、作品は眠っている。これは日頃、収蔵庫と展示場を往来する学芸員だけが感じることもかもしれないが、この保存を第一義とする大きな保存箱では、どんな作品も、それ自身の内に閉じ籠って、死んだように眠っている。それはどこか、人目を意識しない時の私たちに似ていなくもない。

先日のシンポジウムで村田美術課長が、保存の目的のひとつとして、未来の人との共有を図ることをあげていたが、保存とは未来を思う美術館の夢である。物として作品を残すこと、それは、物質の論理に即しながら、物であれば必ずや朽ちていく物質の変化を最小限にとどめようとする点で、自然の論理に対し科学を動員した時間への挑戦である。収蔵庫とは、時間を超えようとする、まさに現代のタイム・カプセルなのであり、変化の相である空間は、保存上は無いことが望ましく、つまりは抑圧されている。

保存とは未来への投企、未来のためのプロジェクトであるが、その現場は、物に即した科学的で具体的な作業の場であって、「未来」はいまだ、抽象的、観念的な目標にとどまっただけで、空間を抑えた保存の「未来」に未来の感触はない。

展示と保存とは、二律背反的に見られ、事実そうなのだが、あらためて申し上げたいことは、二つは美術館の未来志向に貫かれたものであること、というよりは、未来を志向する組織・場・空間こそが美術館という存在なのであり、保存が抽象的に志向する「未来」を、体験できるところへ、開かれた空間という相に引き寄せることが展示ではないかということである。美術館の展示場とは、引き寄せられた「未来」を、観念としてではなく感じとることのできる場所、空間と考へたい。展示を司る者は、タイム・カプセルの眠りを解かれた作品それぞれが発しはじめた声なき声に耳を傾け、ひとつの「森」を演出する。展示を司る学芸員が見るこの真昼の夢、その夢の、答えというよりは手応えは、作品の数だけのサ

ウンド／ノイズが交錯する空間にある。美術館の展示こそ、いまだ実現されざる、いまだ何たるか知りがたき未来を潜在させた空間を開くこと、潜在する未来を感じとってもらえる空間を演出・創造することに他ならない。美術館に来て欲しく願うのは、複製ではなく本物を見て欲しいがためではない。いまだ名もない潜在する未来を感じとってもらいたいからである。

28歳で世を去った青木繁の一点《太田の森》(本会報表紙)は、彼が脚光を浴びることとなった《海の幸》の一年前、21歳の時の作品である。当時、本郷から田端、千駄木あたりを転々としていた青木には、根津権現でのスケッチも残るが、この太田の森は、いまでも「道灌山」に名の残る、太田氏の所領であったところからそう呼ばれていた。恋人となる福田たねとも出会ったころであり、小さくて姿かたちはさだかでないが、木の間隠れの女性らしき人影は、彼女の幻影だろうか、青木の幻視の森は深く暗い。森のなかから笛の音でも聞こえてきそうな、あらぬ世界の入り口に立っている青木が見えてくる。

ここに紹介するもう一点は、19世紀イギリス画壇の重鎮、ジョージ・フレデリック・ウォッツの寓意画《希望》(テイト・ギャラリー蔵)であり、この作品に青木は、「人類の希望の運命」を読み取っている。

うちひしがれたオルフェウスは、すでに目はふさがれ、豎琴の弦も切れている。だが、目を凝らせば、弦は一本だけ残されている。それをあなたはどうか受けとめるのだろうか。どんな音を聴き取るだろうか。

(館長 市川政憲)



ジョージ・フレデリック・ウォッツ
《希望》1886年

○講座ダイジェスト○

友の会連続講座 日本美術「浮世絵の精華」

2月に、国際浮世絵学会常任理事でもある、名古屋美術館学芸課長、神谷浩氏を講師にお迎えし、ヨーロッパでも絶賛された浮世絵の魅力について、連続講座を開催しました。

第1回「浮世絵の魅力を知っていますか」

アメリカの雑誌で「この1000年でもっとも活躍した100人」が発表された。日本人では唯一、86位に北斎がランクインしている。このことは、日本人にとって



は意外なことかもしれないが、浮世絵とその大家たちへの認識が西欧と日本では大きな差があることを示す。明治時代、日本人の無関心をよそに、外国人が浮世絵一枚を考えられないほどの高額な値段で買い取っていった時代、ドイツでは世界初の浮世絵の研究書が出版された。なぜ海外でこんなにも受け入れられたのか。その理由の一つに、浮世絵が1800年代後半にカラー刷りで出版されていたことが挙げられる。日本人自身はその価値に気付いていなかったとしても、当時カラー出版物は人々の欲しい情報を伝えるメディアとしては唯一無二のものだったのである。

しかし当時や次の世代の日本人にとって、浮世絵とは「おじいちゃんが好きで集めたもの」であり、歌舞伎役者などのスターを描いた、現代でいうブロマイドのようなものだった。その為、現代に生きる私たちが、浮世絵を当時の日本人と同じ感覚で楽しむのは難しい。つまり、浮世絵を高く評価したヨーロッパでの反応と同様に、今の日本人はもっと純粋な美術的関心を持って浮世絵を愛でる時代に入ったのではないだろうか。

では浮世絵は具体的にどのような要素で魅力があり、西洋人に影響を与えたのか。一つ目は色の少なさが挙げられる。広重は10色位の版で微妙な色合いのグラデーションを使い分けたり、北斎にいたっては5色か6色しか使われていないにも関わらず、あらゆるものを描きわけた。二つ目は俯瞰的な視点から犬の目線まで、自由に变化する視点の自在さ。三つ目は影を描かないのに頬骨が出て見える、というような独特の立体感。四つ目は大胆にも真ん中に重要なものをおいたり極端に端に寄せる構図のおもしろさ。西洋絵画では重要視されている構図の安定性に欠くが、画家のドガに取り入れられたことが知られる。

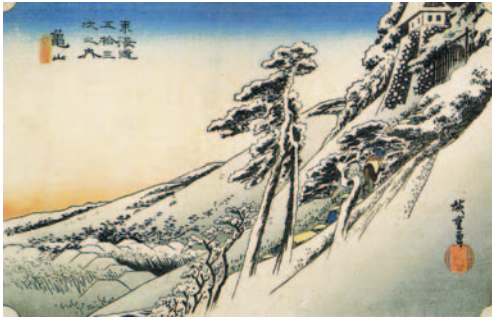
第2回「北斎と広重 どちらの風景画がお好き？」

ゴッホは特に北斎を高く評価し、弟テオへの手紙でも「日本の版画はみな美しい。北斎の富士三百景(原文のまま)と風俗画を買って欲しい。」等と4、5回登場している。一方広重についての記述はないが、ゴッホは北斎に比べ安価だった広重版画を所有しており、これを油絵で模写しその技術を学んだ。

北斎と広重の違いは何か。そこに両者の異なる魅力が見えてくるので、次の4つの視点から眺めたい。まずは風景画。北斎は、大きな波のうねりのエネルギーと、反復する造形的な画面が作り出すインパクトの強い自然と人間のドラマを描いた(図①)。広重は、画面を斜めに仕切り、色数を抑え冴え渡る雪晴れの冷気と透明感を表現した(図②)。



① 葛飾北斎《富嶽三十六景 神奈川沖浪裏》江戸時代19世紀



② 歌川広重《保永堂版東海道五十三次之内 亀山》
江戸時代19世紀

上方の空の青と左下方の僅かな赤が効果的で、最も好きな作品の一つだ。次に人物。北斎は解剖学を学んだかという程のデッサン力だが、画中の人物には対話をさせず構図の一部として配置している。かたや広重は人物一人一人のデッサンは上手とは言えないが、人物なしでは成り立たない絶妙なバランスで顔を描かずその背中に語らせている。次に花鳥画。北斎はまさに鳥が飛び立つ瞬間の劇的場面を描く。広重にはそのような躍動感はないが、鳥を擬人化し愛嬌たっぷりに描く。最後に構図。北斎は、たとえ富士であってもその稜線を絵の中のあしらいとして利用し、同じ線の繰り返しと絵組みの面白さで大変トリッキーに描いている。広重は北斎の奇抜な構図を批判しているものの、思い切ったアングルや、全体を描かず一部を描く巧みなトリミングで、時間の移ろい、音の対比、描かれていない人物の生活を、見る者に想像させた。

このように、北斎は、傑出したデッサン力と構成力を生かして動感と緊張感に富む構図を作り出し、人物よりも全体の色形のダイナミズムに主眼をおいて人々に力強く提示した。一方の広重は、造形上の工夫も凝らしつつ、見慣れた風景に雪雨月夜を取り込み人物の背中に心を語らせることで、抒情豊かな世界を描き人々を惹きつけた。

第3回「歌麿と写楽 蔦屋が送り出した天才たち」

1790年代一流版元であった蔦屋は、当時役者絵で描かれていた大首絵を初めて美人画に取り入れ、既に有名であった歌麿に描かせ世に出し大好評を得た。歌麿が描く大首絵の特徴として、線がきれい、構図が大胆で面白い、ピンポイントの色使いがうまい、表情があり女性の心理と境遇まで見る者に分からせてしまうこと等が挙げ

られる。この女性(図③)は、まさに湯気が立っているように感じる絵である。全体が落ち着いている中で振り向いた首と手に動きがあり、視線と左手のバランスがよい。全体のバランスをとる為に、振り向いた女性を後ろから手で支えているように描く、歌麿独特の構図である。



③ 喜多川歌麿 江戸時代18世紀
《婦人相学十脉 浮気之相》

次に蔦屋は別の版元が出版した豊国の役者絵に対抗し、当時無名の写楽に大首絵28枚を描かせ一挙に出版し世間をあっといわせた。これは異常なことで、大首絵を描くことも高価な雲母刷りも、売れると確信できる一流絵師だけに許されることだった。写楽の大首絵は「悪役も美男子に描く」という当時の暗黙のルールに反して、真に悪役らしく描いてしまった故に非難されたが、1900年頃ヨーロッパではレンブラントやベラスケスに並ぶ肖像画家として位置付けられていたことは見過ごせない。10ヶ月の間に140数枚出版されたが、前半の素晴らしい作品に比べ後半は駄作となったことは大変残念だ。この役者絵(図④)



④ 東洲斎写楽 江戸時代18世紀
《三世大谷鬼次の奴江戸兵衛》

は最近の研究の結果、強盗と警固する侍の2枚組みであることが判明。鑑賞のポイントは目と手だが、不自然に見える手は、刀を抜いた侍にこの強盗が威嚇しながら素手で立ち向かう場面で、緊張のあまり痙攣しているときみれば納得がいくだろう。

3回の講義では、私流の鑑賞の仕方を紹介したが、皆さんは既成概念を持たないで良い作品に向き合い、素直な気持ちで鑑賞してほしい。

(文責：湯田・平松)



AICHI
PREFECTURAL
MUSEUM
OF
ART

MEMBERSHIP

美術館から

美術館の広報

一般的に広報というと、即宣伝と理解される傾向がありますが、実は美術館の広報には二つのパターンがあります。ひとつは美術館そのものの存在あるいは活動を知ってもらうもの、もうひとつは今そこで開催されている事業の告知です。現在、友の会の皆様にご協力いただいている広報活動は後者が中心となっています。

例えば、展覧会ごとの「ポスター掲出」や「ナイトカフェ」、「講演会」などの様々なイベントの開催、あるいは「私の行きつけの店作戦」などは展覧会に直結した広報・宣伝活動です。こうした活動は、ビッグネームの作家の展覧会やグループショーでは、明確な効果測定ができませんが、社会的に認知されていないとかあまりよく知られていない作家などの展覧会では、威力を発揮します。企画展を担当する私は、いつも頼もしく思っています。

ただ、美術館における究極の広報は、美術館の存在をいかに理解していただくかということにあると私は考えます。友の会の皆様は、すでにこうした域に達した方ばかりで心強く思っていますが、一般の多くの方々はそうはいきません。どうぞ今後とも、展覧会の宣伝はもとより美術館そのものをアピールする広報に、美術館スタッフとともにご尽力いただければと願っています。(企画普及課長 木本文平)

友の会活動紹介

- 「ベルシャ文明展」
10月 特別鑑賞会(昼・夜)
11月 伝統楽器鑑賞会 サントゥールの響き ★
- 「ルソーの見た夢ルソーに見る夢」展
1月 特別鑑賞会(昼・夜) ☆
1月 懇親会 ☆
1月 テーマ展作家レクチャー&ギャラリートーク
真島直子「地ごく楽」 ☆
2月 連続講座 日本美術 浮世絵の精華(全3回) ★
- 「若き日の美術家たち」展
3月 特別鑑賞会(昼・夜)
3月 講座 美術の森(市川館長退官記念)

- 定例活動
小物製作 のべ12回
彫刻の枕・座布団・ひも
木村コレクションの風呂敷補修手入れ
収蔵作品のフォルダーとカード作成
発送 のべ8回
受付 のべ14回
アンケート集計 1回
会報発行 第24号発行
ホームページ 随時更新
公開シンポジウムサポート
移動美術館受付 のべ6回
★中面で紹介 ☆裏面で紹介



◎懇親会◎

初めて参加された会員も多く、学芸員合わせて80名ほどの参加者は、担当理事が展覧会にちなんで用意したフランスのチーズやハムやワインに、会話ははずみ大盛況に終わりました。

◎特別鑑賞会◎

懇親会と同日だったこともあり参加者も多く、深山学芸員のレクチャーには展覧会への熱い思いが感じ取れました。ギャラリートークとは違った良さも理解していただける良い機会となりました。



◎テーマ展ギャラリートーク◎

会場では一般の来館者も参加して、市川館長と作家(真島直子氏)とのやり取りに興味深くうなづく場面もあり、鉛筆で刻み込まれるように描かれた作品に多くの質問が投げかけられました。

これからの企画展のご案内

プライスコレクション 若冲と江戸絵画展
4月13日(金) → 6月10日(日)

三館協同企画展 20世紀美術の森
6月29日(金) → 8月26日(日)

リサイクルアート展
9月7日(金) → 11月4日(日)

トゥールーズ=ロートレック展
11月13日(火) → 2008年1月14日(月・祝)

お知らせ

友の会事業拡大に伴い、会員の皆様の窓口となる事務局も強化し、昨年末より真野・鈴木の2人体制となりました。友の会の飛躍に少しでもお役に立てるよう楽しくやっていきたいと思っております。(事務局)

友の会入会のご案内

友の会の詳しい活動内容を知りたい方、入会をご希望の方は、下記までお問合せ下さい。

- 10階愛知県美術館受付
- 友の会事務局 052-971-5511(代) 内線347

編集後記

表紙にはいつも愛知県美術館の収蔵品を掲載しています。今回の作品は特に印刷屋さん泣かせの深い微妙な色あい、実際の絵に出会いたい衝動に駆られます。収蔵品をじっくりと何度も鑑賞できるのも友の会の会員特典のひとつです。(中田)

□編集 水野 愛子/平松 章子/森 健次/伊奈 由希子
湯田 文/折戸 祥子/中田 賢/真野 良子(事務局)

□協力 愛知県美術館企画普及課

□発行 2007年3月

愛知県美術館友の会

〒461-8525 名古屋市中区東横一丁目13-2

愛知芸術文化センター内

TEL: 052-971-5511(代) 内線347

FAX: 052-971-5604

E-mail: tomonokai@aac.pref.aichi.jp

美術館HP: <http://www-art.aac.pref.aichi.jp>